

研究員就任にあたって

中島 耕二

学窓を巣立って31年が経過致します。その間、実業界にあって利潤と効率の追求の日々を過ごしてきた(現在も継続中ですが)訳ですが、それでもエクセス・タイムは学究的な関心を持ち続けたいと考え、比較的身近なテーマであった「近代経営史」と「日本プロテスタント史」、中でも「来日宣教師」を中心に研究を続けて参りました。

話は飛びますが、私が育ちましたのは東京・世田谷で、少年の頃、私共の家の近くに「先生」と慕われていたアメリカ人が住んでおりました。この先生は、リチャード・A・メリット (Rev. Richard Allen Merritt) という米国監督教会(聖公会)の宣教師で、戦後すぐに来日し当時すでに10年近く同地に住み、福祉や教育分野で活躍し、マスコミにもしばしば登場する著名な先生でした。しかし、私共子どもにとってはその価値は当然判らず、その先生の住むお屋敷が日本人のそれと違って、いつも門扉を開け、玄関にカギを掛けていないことから、このお屋敷に自由に出入りし、その広い庭や母屋を遊び場として、それこそ毎日精一杯楽しんでおりました。ただその中にも幾つかの決まり事があり、特に大切なことは、先生からイエス様のお話を聞き、イエス様の歌を覚えることでした。またクリスマス等には先生の運転するシボレーに乗って、覚えてたの歌を携えて、病院や母子寮或いは老人ホーム等の施設を訪ねることも重要なことでした。勿論参加は自由でした

が、賛美歌のレッスンは結構厳しく、合唱、輪唱等を喉が潤れるまで練習させられました。先生は、背の高い骨太の体格をしていましたが、柔らかな美しい声の持ち主で、いつも我々と一緒に歌い、熱心に教えてくれました。

先生は当時40歳を幾つか越えていましたが独身で、そのため我々を自分の子どものように扱ってくれました。当時の平均的日本人である私の父などには照れ臭くて出来ないような愛情表現を、その父に代わって示してくれました。又、先生はアメリカ人特有のユーモアもあって、当時流行していたプロレスの真似をして遊んでくれたりもしました。こうして、小・中・高と成長期を先生の元に日参致しましたが、丁度私が大学に進学する頃、先生は我々の「葡萄畑」であったお屋敷を売って、一人アメリカに帰って行かれました。

話が少し長くなりましたが、私の宣教師研究の原点はこのメリット先生にあります。従って、その研究は当然肯定の立場をとります。しかし、研究である以上批判的視座も不可欠です。この度母校のキリスト教研究所研究員という、格好の場を与えていただきましたので、これを機会に「肯定」と「批判」の立場から従来の研究を更に掘り下げていきたいと思っています。どうぞ宜敷く御願ひ致します。

(なかじま こうじ

キリスト教研究所研究員)

